

聖書箇所：イザヤ書 11 章 1～9 節

説教題：被造物の回復

きょうは、一年に一度の野外礼拝です。神が造られたすばらしい世界が目の前にあります。最近では環境破壊とか、地球温暖化ということが言われ、私たちも環境に易しい生活を心がけるようになりました。でもそれは信仰とはまったく別のことと、信仰は信仰、環境は環境、そんなふうにならぬ心で区別していたと思います。

きょうは結論から述べます。信仰と自然環境のことは区別することではなかった。実は密接に関係している。そのことをきょうは見参ります。

イザヤ書をひらいておられますが、ここを読んでどう思われたでしょうか。6 節。「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。」こんな風景を見たことはありません。いや、こんなことはあり得ない。みなさんそおう思ったはずです。8 節もそうです。「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしに手を伸べる。」実際に自分の子供がこんなことをしていたら、母さんは卒倒するでしょう。

確かに頭の中では、こんなふうになればどんなにすばらしいだろうかと想像はします。でも、絶対にあり得ないと誰もが思います。自然界は、強いものだけが生き残り、弱いものは死んでいく厳しい世界だということを学校で学んできました。札幌では民さんご存じのように、ときどき町中に熊が現れたと言って大騒ぎになります。熊は人も襲うこと

もある恐ろしい動物だからです。では熊は最初から人間にとって恐ろしい存在だったのか。

創世記 1 章 2 章を見れば、実はそうではなかったことがわかります。神がこの世界を造られた六日目に、神は「それは非常に良かった」と語りました。もうそれ以上手を加える必要がなかったのです、それで神は七日目には休んだとあります。イザヤ書に書かれている風景は、あり得ない理想の世界ではなかった。実は世界が造られた最初は、これが当たり前だったのです。

ではどこで変わってしまったのか。アダムとエバが神に背いたときからこの世界はのろわれてしまいました。人間が犯してしまった罪が、この世界をすべて狂わせてしまった。それ以来、被造物はうめいているのだとパウロは言っています。

今見ている世界。これが当たり前だと私たち思っていますが、実はきわめて異常な世界なのです。

このことについてパウロは、「被造物も、切実な思いで神の子供たちの表れを待ち望んでいる」とも言います。神によって造られた最初の世界に戻されることを被造物が待ち望んでいると言うのです。そんなことが起きるのでしょうか。起きるとすればいったいどのようにしてなのでしょう。

私たちは信仰ということを考えてとき、いつも自分のことがまず中心にあったと思います。「聖書を読んでこんなふうには生きなけ

ればと示された。みことばで責められ、悔い改めに導かれました。ある人と和解しました。家族に福音を伝えることができました。自分の罪を知らされました。」そんなふうになっていきました。確かにそのとおりです。

ところがこのイザヤ書を読むと、信仰というのはどうもそういうことだけではなさそうなのです。9節。「わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」

「主」とはいったい誰か。1節に「エッセイの根株から神明が生え」とあります。エッセイとはダビデの父のことです。ダビデの子孫として来られたイエス・キリストのことを言っています。そのイエス・キリストを知ることが海をおおう水のように、地を満たすと言います。どんなふう知られ、どんなふうに地を満たすのでしょうか。

信仰というかたちをとおしてです。主を知らずに信仰を持つことはありません。主を知り、その次のステップとして信仰に導かれていきます。私たちは必ずこのプロセスを経て信仰をいただいてきたはずです。そんなふうにして、主を信じる者が少しずつ地を満たし始めています。それがやがて海をおおう水のように広がります。その結果、被造物の回復が起きていく。あり得ないと思えたような、すばらしい光景を私たちは見るようになる。そんな約束がここで語られています。

信仰が地球環境のことに結びついていると聞き、驚いたかもしれません。信仰と言っても、たいしたものではない。ちっぽけなものに過ぎない。そう思っていたかもしれません。そうではない。私たちの小さいと思える信仰が、すばらしい未来の実現に大きく貢献

するのです。

テレビや新聞で、環境破壊を食い止めるために知恵を出し努力している人たちの姿を見ると尊敬します。あの人たちに比べると、自分はどうか。できる事と言えばほんのちよっぴりで、ほとんど役に立たない。そんなふうにして自信を失います。とんでもありません。私たちは少し誇ってよい。

最後にもう一つ、私たちにとって励ましとなることがあります。

自然界は弱肉強食の世界。人間もそれと同じ。強い者、能力のある者だけが勝ち残る。でなければ惨めな人生を送るしかない。そういうプレッシャーの中でがんばってきました。どんな時代であっても変わらない普遍的な基準だとたたき込まれ、なんとか上を目指そうと苦しんできました。

でも今日の箇所を読むとどうですか。強い者が勝ち、弱い者が負ける。そんなことは、神にとってきわめて異常なことだった。ひどくゆがんだ世界であった。そんな世界はやがて終わります。すべてのいのちあるものが、そのまま豊かに共存できる世界が来るのです。もう相手に嫉妬したり、自分に嫌悪感を感じたり、持っている人をねたんだり、持っていない自分を恥ずかしく思ったり、そんなことで苦しむことはない。

これは天の御国の風景です。でも手の届かない世界なのではない。私たちが神を信じていること、そのことが、天の御国建設の大きな力となっている。

そんな力をゆだねてくださる神に感謝します。